様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２８ 日現在

機関番号：２８００３
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2018
課題番号：２６７７０２２５

研究課題名（和文）種子島史料の研究

研究課題名（英文）Research on the Historical Document preserved in Tanegashima Island

研究代表者
屋良　健一郎（Yara, Kenichiro）

名桜大学・国際学部・上級准教授

研究者番号：４０７１０１５８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、中世・近世の種子島およびその領主であった種子島氏と他地域との交流を明らかにすることで、日本の歴史における種子島の位置づけを考察するものである。本研究の主な研究成果としては、種子島と琉球との交流の一端を示した点にある。近世の薩摩藩において琉球との交渉を担当する立場に種子島家当主が就いていたという政治的な状況に加え、薩摩・琉球間を往来する船に種子島船が使用されていたという流通面での状況、琉球の漂着船が着きやすいという地理的状況が背景にあり、「鎖国」下で海外との交流が限定されていた近世日本において、種子島は比較的多く「異国」琉球との交流が確認される地であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術的意義は、種子島所在の様々な史料を調査し、その一部を紹介できたことである。従来の研究では活字化・刊行されていた「種子島家譜」（種子島家が編纂）が主として用いられてきたが、本研究で調査した史料を用いることで、「種子島家譜」だけからは見えてこない事柄、たとえば家臣や島の人々の動向などを知ることができ、種子島の歴史や種子島と島の外との交流の在り方をより詳しく解明することが可能となろう。種子島所在の様々な史料を調査・活用した本研究の成果は、今後、種子島の人々が郷土の歴史を知る上でも何らかの役に立つものと考える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to investigate the actual status of interactions between Tanegashima island and other regions.This study was conducted mainly by researching on the historical document preserved in Tanegashima island.The results indicate that the premodern maritime movement of goods and people between Tanegashima island and Ryukyu islands was more active than we thought.Through the transportation of goods and the save of drifting ships,there were exchanges between Tanegashima people and Ryukyuans.

研究分野：日本史

キーワード：古文書　家譜　漂着　交易　琉球　史料調査

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究は、中世・近世の種子島の領主であった種子島氏および同島民の他地域との交流を明らかにすることで、日本の歴史における種子島の位置づけを考察するものである。種子島をめぐる歴史研究は、主として鉄炮伝来との関わりの中で行われてきた。そのため、鉄炮伝来において種子島および種子島氏が果たした役割については研究が深められる一方、薩摩島津氏をはじめとする国内の諸勢力との関係や、日本最南端の領主とも言うべき種子島氏が版図を接していた琉球王国との交流などについては充分に解明されているわけではない。そのような研究状況を踏まえ、本研究では中世・近世の種子島の歴史を多角的に研究することを目指した。

２．研究の目的

中世・近世の種子島の歴史を多角的に分析し、日本の歴史上における位置づけを考察するのが本研究の目的である。そのためには、種子島現地での史料調査が重要となる。従来の種子島をめぐる研究においては、活字化・刊行されているという利便性の点から、「種子島家譜」（『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺家わけ四』および『家わけ八』『家わけ九』所収）が主として用いられてきた。種子島家が近世に編纂した「種子島家譜」が種子島および同家の歴史を知る上での重要な史料であることは間違いないが、いくつかの点に留意する必要がある。「種子島家譜」以前にも種子島家は家譜を編纂しているほか、家臣の手になると思われる家譜に類似する史料があり、それらの間では記事に若干の違いがあること。「種子島家譜」は種子島家当主の事績を記すことに主眼を置いているため、家臣や島の人々のことについて必ずしも充分な情報量を持っていないこと。本研究ではこれらの点に留意し、現地での史料調査を通して「種子島家譜」以外の史料もできるだけ多く収集し、「種子島家譜」だけでは見えてこない種子島の歴史を解明することを目指した。

３．研究の方法

本研究は概ね、史料の調査・収集、史料の翻刻、史料の読解といったプロセスで行われた。主として種子島の博物館や図書館で調査した史料を翻刻して学会や論文等で紹介すると共に、それらの史料をもとに考察を進めた。従来の研究では主として種子島家によって編纂された「種子島家譜」が用いられてきたが、これに加え、それ以外の史料（古文書や家臣が記した記録など）も調査の対象とした。「種子島家譜」をはじめとする家譜類によって種子島の島主である種子島氏の活動を明らかにし、その他の史料によって、家譜からは明らかにし得ない家臣や島民の動向を知ることで、種子島と諸地域との交流を総体的に把握することが可能となると考えたためである。

４．研究成果

（１）研究成果の概要

本研究の成果は主に 3 点に分けられる。

①種子島と琉球の交流について

本研究では、近世における種子島と琉球との交流の一端が明らかになった。従来の研究においては、中世の種子島氏の琉球通交がよく知られていたが、近世については琉球から種子島に甘藷が伝来したということの他はほぼ注目されていなかった。種子島現地での史料調査を実施した本研究において、鹿児島琉球館滞在の琉球役人と鹿児島にいる種子島家家臣との間の交流、漂着船の送還を通しての文書のやり取りなどが確認された。近世の薩摩藩において琉球との交渉を担当する立場に種子島家当主が就いていたという政治的な状況に加え、薩摩・琉球間を往来する船に種子島船が使用されていたという流通面での状況、琉球の漂着船が着きやすいという地理的状況が背景にあり、「鎖国」下で「異国」との交流が限定されていた近世日本において、種子島は比較的多く琉球との交流が確認される地であった。

②種子島家と島津家との関係について

本研究では種子島家が編纂した「種子島家譜」以外にも、種子島家の家臣によって記された書物なども研究対象とした。その結果、「種子島家譜」では明記されていない 16 世紀の島津相州家（近世に薩摩藩主となる家）との敵対関係や、島津家と種子島家が中世のある時期までは対等であったという歴史認識が、家臣の記した書物には見られることが確認された。どちらかと言うと島津家に忠節を尽くす種子島家の姿が描かれる「種子島家譜」とは異なる姿が、家臣たちの間では記され、語り継がれていたと考えられる。このことは、近世の編纂物である「種子島家譜」から中世の種子島家・島津家との関係を考える際に留意すべき点であろう。

③種子島所在の史料について

本研究では種子島現地での史料調査に重きを置いた。その結果、近世の古文書や様々な書物を調査し、その一部を紹介することができた。今回の研究期間においては充分に検討できなかったものも多いが、「種子島家譜」では見えづらい家臣の動向、島の人々の生活や寺社の由来などを伝えるものもあり、これらの史料を今後本格的に読み解くことで、種子島の歴史を当主の視点だけではなく、多面的に理解することが可能となろう。

（２）研究成果の公表
　本研究の成果を公表する機会として、種子島の西之表市と連携して 2019 年 3 月 10 日（日）に歴史シンポジウム「種子島と東アジア海域」（主催：西之表市／名桜大学総合研究所）を開催した。このシンポジウムでは、本研究の代表者が研究成果を報告すると共に、村井章介氏・伊川健二氏・村川元子氏・鮫嶋安豊氏といった種子島を研究対象としてきた方々にも登壇いただくことで、現在の研究の状況を示しつつ、今後の種子島研究の展望を研究者と市民とで共有する機会とした。また、同日、種子島開発総合センター「鉄砲館」において史料見学会を実施し、本研究期間において調査を行った同館の史料について解説を行い、研究成果を公表する機会とした。シンポジウムには約 120 名、史料見学会には約 20 名の市民が参加した。

（３）今後の課題
　本研究では明らかにできなかったことに、種子島の文化史がある。種子島は「和歌の島」とも呼ばれることがあり、和歌が盛んだったと言われる。本研究では和歌関係の史料は数点しか確認できず、また、種子島における和歌受容の実態については依然として不明なことが多い。和歌を通じて琉球と交流があったことをうかがわせる史料も存在しており、種子島の和歌史の解明は、島の外との交流を知る上でも重要と思われる。今後の解明が待たれる。
　また、本研究の申請時においては、種子島における研究が順調に進んだ際には、種子島と歴史的につながりの深い屋久島・口永良部島の調査を行うことも想定していた。しかしながら、今回の研究期間ではそれらの島々の調査までは行うことができなかった。種子島および種子島氏の歴史を広い視野から捉えるためには、それらの島々やトカラ列島の調査も必要であり、今後の課題としたい。

５．主な発表論文等
〔雑誌論文〕（計 2 件）
①屋良健一郎「近世種子島の史料における琉球関係記事」『立正大学人文科学研究所年報 別冊』第 20 号、2019、pp.19-27、査読無

②屋良健一郎・鮫嶋安豊・中村圭佑「種子島開発総合センター鉄砲館所蔵『御家記』の紹介」『名桜大学 総合研究』第 28 号、2019、pp.172-194、査読無

〔学会発表〕（計 2 件）
①屋良健一郎「近世史料に見る種子島とその周辺」奄美沖縄民間文芸学会、2018

②屋良健一郎「種子島の家譜史料とその周辺 ―種子島家の「歴史」と家臣が記した「歴史」―」日本古文書学会、2017

〔図書〕（計 2 件）
①木村直樹・牧原成征編『十七世紀日本の秩序形成』吉川弘文館、294 頁（うち pp.160-190 に「中近世の種子島氏と島津氏」を執筆）、2018

②菅野敦志編『沖縄／日本の文化・社会・共同体と国際環境』沖縄タイムス社、137 頁（うち pp.56-69 に「江戸時代の種子島と琉球・薩摩」を執筆）、2016

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：

取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等：なし

研究発表：
①屋良健一郎「近世の種子島と琉球」歴史シンポジウム「種子島と東アジア海域」（主催＝西之表市・名桜大学総合文化研究所）、2019

②屋良健一郎「中世・近世日本の対外認識」日タイ国交樹立 130 周年記念 2017 国際シンポジウム「アジアの文化接触・文化変容」（於サイアム大学）、2017

③屋良健一郎「近世の種子島と家譜史料」島嶼研究会（於鹿児島大学）、2015

④屋良健一郎「江戸時代の種子島と琉球・薩摩」開南大学応用日本語学科・名桜大学国際文化専攻国際シンポジウム「沖縄／日本の歴史・文化・共同体と国際環境」（於開南大学）、2015

６．研究組織
(1)研究分担者
研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。